

---

Chocolate      甘い初恋

三月 亜莉棲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chocolate 甘い初恋

### 【Nコード】

N4076Y

### 【作者名】

三月 亜莉棲

### 【あらすじ】

工藤新一はたまたま、居眠りをしていたとき、クラスメートの甘音沙琶は

少し不安があった。そしてとうとう、先生がその不安の種の話が始めた。

それは、『今日、交換留学生を決めようと思っている。』毎年、代表の交換留学生はロンドンの『ファルダントンハイスクール』に行き3日過ごした後、代表を決めつれて帰り代表は3日間帝丹高校で過ごすというもの。

毎年、代表になっていた沙琶は昔住んでいたロンドンに行くのに飽きていて、代表になりたくなかったが先生は『今年は代表をココのクラスだけ4人にするそうだ！』と告げられて・・・

このお話は、新一がコナンになることはありません。  
また沙琶と新一が恋をするというお話ではありません。

## 登場人物

工藤新一（高3）

高校生探偵、成績優秀スポーツ万能。完璧な存在だが蘭だけにはかなわない。

毛利蘭（高3）

空手都大会優勝経験アリ。美人でとてもフレンドリーだが、やさしすぎてだまされてしまう事多々アリ。

鈴木園子（高3）

鈴木財閥の令嬢。

蘭の幼馴染で新一とは悪友。

甘音沙琶（高3）

10歳までイギリスのロンドンに住んでいた。  
毎年、交換留学生に選ばれ今年もなってしまうのではないかと不安。

成績優秀で英語の他5ヶ国語をしゃべる事が可能。

水間涼希（高3）

沙琶の幼馴染で沙琶と同じく10歳までロンドンに住んでいた。

沙琶と同じく交換留学生に選ばれるのを嫌がっている。《理由は  
上同》

成績優秀で英語の他5ヶ国語をしゃべる事が可能。

港都ジュリア（高3）

沙琶の幼馴染。しかし沙琶とは違い、ジュリアはフランスのパリに

住んでいた。成績はまあまあだが、語学は得意で沙琶と涼希と同じく

5ヶ国語を話す事が可能。交換留学については上同。

紅岬梓（高3）

フランスの学校から転校してきた。

3ヶ国語を話す事が可能。

サラ・コーラル

フェルダンタンハイスクールの生徒。

日本語が話せる。

ビスタ・アレイ

《上同》

サラの幼馴染。

イザベラ・ルーラ

愛称はベラ。

日本語が話せ、5歳までフランスに住んでいた。

パーシー・ジェイソン

ベラの彼氏。10歳まで日本に住んでいた。

増えるかもしれませんがよろしくお願いします！

# Chocolate (前書き)

園子視点です。

## Chocolate 1

「おはよう、蘭ちゃん。」

「おはよう、沙琶ちゃん。」

「そういえばさ、もうすぐだよね・・・」

「ああ！交換留学？いいなあ沙琶ちゃんは毎年言ってるんでしょ？  
あたしも行きたい」

「あたし的にはフランスがいいなあ、ジュリアの故郷だし、お父  
さんもフランス人でしょ？」

「うん。そうだけど、あたしはベルギーがいい！だってフランス  
もイギリスも行き飽きたもん。」

「うつせーな。」

「あさっばらからよくそんな話できるわなあ。まっ俺も行きたく  
ないのはおんなじだけだよ。」

「涼希だけはそーゆーのわかってくれるから許せる。」

「なのに新一はどうして・・・」

「ちよっ・・・ら、ん？」

（殺気が・・・汗）

「おりゃーーーーーっ！！！」

「おわっ！？」

始まった・・・（汗）

どうしてこうなのかねえ・・・

お互い好きなのは見え見えなのになんで付き合わないのかしら！  
ほんと、苦労するわ・・・（呆）

「席付けー！転校生がきとるぞー！」

「どんな子お？」

「ほんにんに聞け。入れ。」

「失礼します。」

「おわっ！」

「工藤あぶねえ！」

「へっ？おわつと。」

フウー。皆安心、転校生にぶつかることだった。

「工藤・・・お前は・・・（怒）」



「先生まで怒らないでくださいよ。逃げるの大変なんすから。」

「席に着け。」

「へーい。」

新一君バカじゃないの？

早く名前聞きたいなあ。どんな子だろ？

「じゃあ自己紹介しろ。」

「紅岬梓こうしほです。フランスから来ました。  
よろしく願いしまーす」

「じゃあ鈴木すずきの右横だ。」

おっ！あたしの隣じゃーん

「よろしくね？紅岬さん」

「うん！よろしく」

「それと皆にお知らせがある。」

「なーに？先生。」

「今年もやって来た。交換留学だ。」

「「「「「やったー！」「」「」「」

「それで代表を決めたい。投票でしようと思うから各自、

代表になつてもらいたいやつを考えとけ。」

「「「「「「は——い——!」「」「」「」

今年は誰だろ。

去年。新一君と蘭が代表で行つたけど・・・

「あつそれと!」

「それと?」

「今年は代表が4人になった。しっかり考えとけ!。」

ザワザワッ

ありやりやあ・・・

どうしよう。あと二人はどうしようかなあ・・・。

## Chocolate2 梓の思い（前書き）

梓視点です。

## Chocolate 2 梓の思い

「それどういこと・・・？」

ここはフランスのParis。

今回は私が、帝丹高校に来る前のお話をするわ。

「だから・・・日本に転勤だ。」

私のお父さん、紅岬 聖は外務省に勤務していて海外への転勤は普通だった。

そして今回、私は日本に戻らなくてはならなくなった。

「お母さんはどうするの？お母さん、ココ離れられないよ！」

私のお母さん紅岬 麗華はFranceで有名な洋服ブランド&チョコレート会社の社長。こっちに来てお母さんは余裕ができたから趣味としてはじめたのが大当たり。いまではFranceを歩くと周りはほとんどお母さんのブランド『フェリーチエ』の洋服を着ているし、みんな私に『フェリーチエのチョコレート残ってる？』って聞いてくる。

「母さんもついてくる。日本にも『フェリーチエ』を開くんだ。」

「よかった・・・でも私、友達と別れたくない。」

私は、生まれてすぐFranceに来てずっとこっちだったから友達と離れるのは悲しかった。

「じつはな……。お前をこっちに残すとしばらく連絡が取れなくなるんだよ。」

「なんで？」

「日本で父さんは外務省の上の方につくんだ。だから忙しくて母さんも父さんも

お前に連絡できんだ。だから……。我慢してくれ。」

「わかった……。私、行くわ。」

こうして、私は日本の東京の帝丹高校に転校することは決まったの。

## Chocolate 2 梓の思い（後書き）

さてさて・・・この先、まったく話を考えておりません！

（じつは他の話のそんな感じで思いつきで話進めるんで最後はどうなるか大抵

わかりません・・・）

ですが、すぐに投稿しますのでお楽しみを！（おいおい・・・）

### Chocolate3 交換留学に行くのは誰？

「それでは、いまから交換留学の代表を決める。  
4人の名前を紙に書いてここに出せ。」

「『はい。』『』『』『』『』」

みんなが紙を出して結果を見た。

結果・・・

工藤 15

甘音 14

毛利 11

水間 6

港都 4

「つてことで代表は工藤、甘音、毛利、水間だな。」

「またかよ・・・。」

「工藤・・・。よろしくな・・・交換留学。」

「おう・・・。」

「やった 交換留学大好き！」

「のんきでいいなあ・・・蘭ちゃん。」

「さすが毎年行ってる人はちがうねえ・・・」

「当たり前でしょ？つてか、1年行つてないとそんなに楽しみなわけ？」

「もっちろん！」

「あきれる・・・」



「そうだ！交換留学の代表4人は放課後に職員室に来いよあ！」

「めんどくせー。」

「工藤、来ないと明日居残りさせるぞ。」

「うっ。はい・・・。」

と言うわけで交換留学は、

新一、蘭、沙琶、涼希で行く事になったのであった（チャンチヤンツ）

「じゃあ工藤、毛利、甘音、水間。頑張ってきて！それとつれてくるのは4人だから

間違えて2人にしないようにな！」

「」「」「わかってます。」「」「」

そして、飛行機内に入ったものの・・・

「席、どうする？」

「そっぴやそっぴやだな。」

そう、蘭と新一はカレカノ同士だし、沙琶と涼希も幼馴染だから。沙琶と涼希的には

蘭と新一を隣同士にしてやりたいのだが、上の発言をした人物が蘭だったためどうしようか

困ってしまった。

「あたしはどうでもいいよ。」

「俺も。」

「俺もだな。」

「じゃあグッとパー？」

結局コレだ・・・

「」「」「グッとパーで分かれましょ！」」「」

結果は・・・

「あたしパーみたい。」

「私はグーだよ。」

「俺はパーだけど。」

「俺はグーだぜ。」

やってしまった・・・

蘭と新一を隣にしようと思い、

いつも気が合う沙琶と涼希はいつも通り、手を出したが

いつもなら同じはずなのに、こういうときに限って新一と沙琶、涼希と蘭になってしまった。

「じゃあ、沙琶ちゃんたちはそこ座って？私たちはココでいい？」

「」「Ok」「」

しょうがなく、沙琶と涼希はお互いの席に座った。

新一は少々がっかり気味のようだ。

（工藤君、ごめんね？ほんとに涼希となると思っただけど…）

（しょうがねーよ。甘音にもわりーしな。）

（あれっ？ちょっと工藤君まって？涼希からだ。工藤君によ。）  
そのメモサイズの紙に書かれていたことは、

工藤

わりーな俺、てつきり沙琶と一緒にと思ったんだけど…

帰りの飛行機では、お前を毛利の横に座らせてやるぜ！

水間

（なんだよこれ笑）

（ねっ？思ってることも一緒なんだからあたしたちお互い横同士にしようとしてたんだ。）

（ありがとな。甘音。）

（ううん。）

そして、お互い、趣味が一緒なせい（蘭と涼希の場合は涼希が

合気道をしていたから、そして

沙琶と新一の場合はシャーロックホームズが好きなのと父親が作家ということ（ずーっと

お互いの話に夢中になっていた。

## Chocolates ファルダントンハイスクール

俺たちはとりあえず、ハイスクールについた。

自己紹介は終わって静かになるかと思ったら・・・

「Mr. Kudo is a high school student detective?

He is I Hwang! Give me a sig

n? (工藤君って高校生探偵だよね? 私ファンなの!

サインちょうだい?)」

「Although it is good ... (いいけど・・・)」

「It did! ... (やったー!)」

とまあこんな感じで休み時間、俺はとにかく大変だったんだ・・・。

まあ蘭の場合は、

「It is lovely. It will go to play after school. (可愛いね放課後遊びに行こうよ。)」

「Even if it says suddenly ... (いきなり言われても・・・)」

これはさすがにいらついた。

でも、甘音がなんとかしてくれたから大丈夫だった。

そして、夜はここで仲良くなった友達の家に行くことになった。

しかも、隣の家同士の友達に誘われたんだ！

丁度いいから甘音も蘭もOkしてた。

俺たちはたまたまその子のBoy friend（彼氏）にあたっただけだね・・・（笑）

それで、甘音と蘭はイザベラ・ルーラの家に、俺と水間はパーシー・ジェイソンの家に行く事になった。

（まあ寝る前まではほとんど一緒だったけどな。仲いいし、楽しかったから）

パーシーは日本語がしゃべれるから（てかしゃべりたいらしい）ずっと日本語だった。

「なあ、工藤。毛利ってお前の彼女？」

「そうだけど？」

「美人見つけたな。幼馴染だったっけ？俺もそうだな。」

「ってか工藤、お前小学生るときから毛利好きなんだろ？」

「えっ！まじかよ工藤！水間！詳しく教えてくれよ！」

そんな感じで延々と俺と蘭が出会っ経緯と付き合っまでを水間にはなされちまっただよ（涙）

女子はどうしたんだろうな？



## Chocolate6 パーティーに行く前に・・・（女子編）

「明日は、パーティーがあるのよ！」

友達の中で何人か呼んでるからよかったらこない？」

「いきたい！」

私たちは、イザベラ（以後ベラ）の家でいろんな話をしてるの！

ベラはお母さんがハリウッド女優で、いまは家にいないんだけど、お父さんが家で弁護士の仕事をしていて、すごくかっこいいお父さんなの！

明日は、ベラのお母さん主催のパーティーがあつて、それに出て欲しいって！

「じゃあ、こっちにきて。明日着るドレスを選ばなきゃ！」

「え！・・・いいの？借りちゃって。」

「大丈夫よ。行きましょう。」

ファッションルーム

「す、すごいね・・・。」

「ドレスがいっぱいね。ベラ、これあなたの？」

「ゲストの人やもちろんお母さん、そしてあたしのもあるわ。それでも好きなやつをどうぞ」

沙琶ちゃんが思いついたみたいにいい始めたんだけど・・・

「ねえねえ！みんな他の人のドレスを選ばない？  
あたしが蘭ちゃんのを選ぶ！」

「じゃあ、私は沙琶のドレスを選ぶわ。」

「じゃああたしがベラ？」

「「「やろう！」「」「」

ということで、お互いのドレスを選ぶ事になったんだ。

「靴と、髪飾りの選んでね？髪型はメイクアーティストに頼むから。」

化粧とアクセサリーもドレスに合わせてしてくれるわ。」

「ちよつとベラ、きて？」

「ええ。」

蘭が、ベラに選んだのは、シャンパンゴールドのリボンとパールと貴重としたドレス。

髪飾りは、少し濃い、クリーム色のリボン。靴は、シャンパンゴ

ールドのパンプスでパールが付いている。

「じゃあ蘭はこれ！」

沙琶が見せたのは、淡い薄めのブルードレスで腰の辺りに白のりボンが巻いてあるミニドレス。

髪飾りはシンプルな黒のカチューシャで靴はドレスに合わせたブルーの靴。

「じゃあ沙琶、あなたはこれかしら？」

ベラが選んだのは、クリーム色の胸元にピンクのバラのコサージュが付いたドレス。

髪飾りはピンクのオシャレなかんざし。

「じゃあこれでO k ね、じゃあ明日のために確認でどっいう風になるか見ておきましょう？」

メイクさんがまってるし。」

こうして、女子はパーティーに出る準備が整い、パーティーに向けて確認用のドレスアップをはじめた。



「とりあえずいこうぜ。皆待ってる。」

まあスーツを着せられた俺たちは、パーティー会場に行くことになったんだ。

しかも、涼希と俺のスーツ、サイズピツたしなんだけど……。

もともと行かせるつもりだったな……。こりゃ（汗）

## Chocolate 初恋が実るパーティー（前編）

「おいおい……。なんだよこれ。」

パーティー会場には男性がある人たちを中心に集まって囲んでいた。

「俺も予想外だ……。」「

「もちろん。中心は……。」「

「蘭っ！」「沙琶っ！」「ベラっ！」「

コンッ コンッ

「新一！」「涼希！」「ハイ。パーシー。」「

「「「嘘だろ……。」「」」

そう、いつもと違う彼女たちが（涼希にとってはまだ幼馴染）目の前に立っていて  
とっても綺麗だからだ。

「変だった？」「変だったかしら？」「変……かな？」「

「「「いえいえ全然。」「」」

「よかった」

それからパーティーは着々と進んで夜も更けていくのであった。

**C h o c o l a t e 8 初恋が実るパーティー (前編) (後書き)**

題の通り、次回は後編です(笑)



Chocolate 初恋が実るパーティー (後編)

たくさんおしゃべりした。

すっごく楽しかった。

でも、ひとつわかったことがあった。

あたしは涼希が好き。

そんな時、

「なああっちいかなーか？」

「？ う、うん。」

涼希は奥のベランダの方につれてきてくれた。

あたしが、人ごみが苦手でそろそろ駄目じゃないかと気を使ってくれたみたい。

「夜風って気持ちいいね。」

「そうだな、でもあたりすぎると風邪引くぜ？ 着とけよ。」

涼希がカーディガンをかけてくれた。

あつたかい・・・。

「あのさ？涼希って・・・好きな人いるの？」

「へっ？唐突だなあ・・・でも、いるよ。」

そんな・・・。

そっか、あたし涼希のこと好きになっちゃいけないかったのかな。

「お前だよ。」

「え・・・？」

あたしは涙をこらえながら驚いた。

「いま・・・いまなんて・・・？」

「だから、お前なんだよ。好きな人は、甘音沙琶。」

「う・・・そ・・・」（ポロツポロツ）

「お・・・おい。いやだったか？いやだったんなら」

「ううん。うれしかったの・・・。あたしも・・・あたしも涼希が好き！」

涼希が抱きしめてくれた。

涼希の腕の中はすつごくあつたかかった。

あたしは、涼希じゃないと駄目なのかもしれないな・・・。

I  
L  
o  
v  
e  
  
y  
o  
u

交換留学ファルダントンスクール代表は・・・。(前書き)

パーティーの2日後です

英文に訳すのがめんどくさいので  
日本語で書きます(『』が英語です)

交換留学ファルダントンスクール代表は・・・。

『それでは、そろそろ我が校からの代表を決めたいと思います。』

ザワザワ

クラスがざわめき始めた。

『静かにしてください。それでは、私たちが決めた代表者を発表したいと思います』

沙琶が綺麗な鉛のない英語で話し始めた。

そして、字の綺麗な蘭がホワイトボードに名前を書き始めた。

P e r c y J a s o n

I s a b e l l a r u l e r

S a l a h C o r a l

V i s t a a r e n e

『この4人です。出発当日までに準備をしておいてください。』

ベラとパーシー。そして、残りの2人はもともと新一が前の  
交換留学で仲良くなったビスタ・アレインと同じく蘭が仲良くな  
った

サラ・コーラル。

日本での交換留学はうまくいくのか！？

ただいま帝丹高校！

「つーことで、仲良くするように！英語できねーやつは勉強しろ！俺はそこまでやさしくねーかな。」

はい！

新一君と蘭、そして沙琶と水間君が帰ってきましたー！！

「園子、ただいま」

「お帰り！蘭。」

「初めまして！アナタが園子ちゃん？お話は蘭から聞いてます」

「うん！そうだよ。日本語上手ね」

「ありがとう。私はサラー・コーラル。よろしく」

「鈴木園子。よろしく」

むこうでも仲良くおしゃべりしてる。

男子の方も日本語ではなしてるなあ。

「そうだった。今日、私何処に行く事になってるの？」

へ・・・っ？

どゆこと？

「ああ。それだったら、私も含めて新一の家にお泊りだね。」

「ああ工藤君？確か相当でかい洋館だったわね。」

「うん、そうそう。無駄にでかい。」

「いえてる（笑）」

「ああ今日泊まるどころ？」

「そうそう。」

なんだよかった。どっかに遊びに行くのかと思った。

あたしがいけないからね。今日は父さんの面倒見（ってかお手伝い）しないといけないから・・・。

ちょっとまってよ？

「あああああつあああああ！」

「どうしたの？園子ちゃん。」



「あたしのごとは園子でいいよ！それと今日……。ベラ！」

「ほへっ？」

ベラ、間抜けな声だしちゃったわね……。それはそうと……

「今日ってうちに泊まるんじゃないかなかったっけ？ベラとパーシー。」

「……………」

「そうだったあああああああああああ！！！」

とゆうわけで……。ギヤーギヤーいってごめんなさい。

（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4076y/>

---

Chocolate      甘い初恋

2011年11月30日19時58分発行